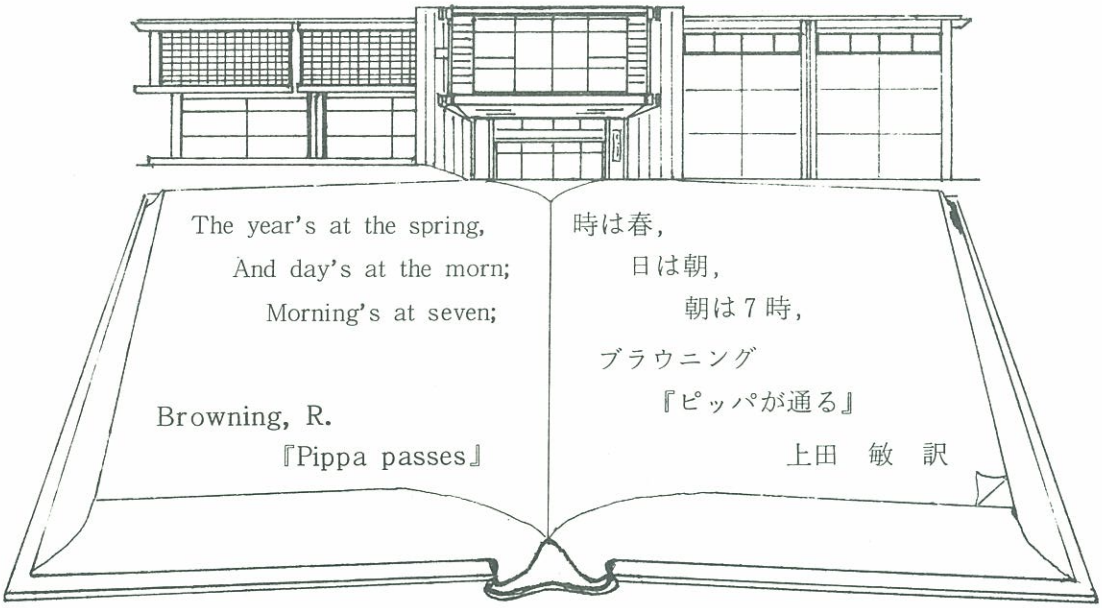
北海学園大学附属図書館報

図書館だより

第3巻1号
〔通巻77号〕
1981春季号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



目次

図書館は大学の魂である　小野　誠二
図書館利用案内
新着案内　▼書評
経済学関係　エコノミスト　大場四千男
法律学関係　ジュリスト　小林　資郎
工学関係　テクノロジスト　佐々木博明
教養関係　ユマニスト　藤田　正
卒業生小特集　図書館雑記　後藤田利文
〝満員御礼〟　和佐　俊美
レファレンス・コーナー　文献解題
欧文和語　(1)〝So it goes〟　宮下　雅年
キーワード「自律訓練法」
エアメール　(4)「エンジョイ」　佐藤　順
閑想歓談「大原孫三郎と大原社研」　小林　真之
ミクロ・コスモス「『神曲』煉獄篇第三十歌」　本城　誠二
編集後記

開館時間　月～金曜日　9：30～20：00　土曜日　9：30～18：00

図書館は大学の魂である

図書館長　小野誠二

論文を書く都合上，北川宗蔵『弁証法の根本法則』(昭23) を読みたいと，カードをめくったら簡単にみつかった。有難かった。また，必要があって，『元田永孚文書』(昭44)について尋ねてみたら，すぐに書庫からもってきてくれた。正直言って驚いた。

図書館では，希望の本がなければ，他に問い合わして，是が非でも見つけ出そうという素晴らしい努力もしてくれる。昭和22年に，私は，新潟市から出ていた『青年文化』という雑誌に「前進」という所感文を投稿し，それを載せて貰った。投稿したのも採用されたのも初めての経験であった。もし，その雑誌が国立国会図書館にあったら，コピーを，という手続きをとった。ほとんど期待していなかったのに，一週間ほどしたら，確かに私の手元に届いたのである。見事だと感嘆した。その雑誌は，私の文章の採用通知があっただけで，実際にはついに送られてこなかったものだから，30余年振りで，若き日の私の「熱き想い」の籠められた短文に再会し，いや，活字になったのには最初の出遭いをすることとなり，不覚にも（？）眼をうるませたのであった。

話は一転して，告白すると，実は，大学生の四年間，私はただの一度も図書館を利用したことがない。それなのに，恥を忍び，敢えて，「図書館は大学の魂である」と大声をあげるのは，その後大学院生になってから今日に至るまで，知的探険にとって図書館ほど恰好の場所がないことに感じ続けてきての深い謝念と，それならなおさら，大学生だった四年間，図書館を訪れなかった強い悔恨の，二つの理由からである。

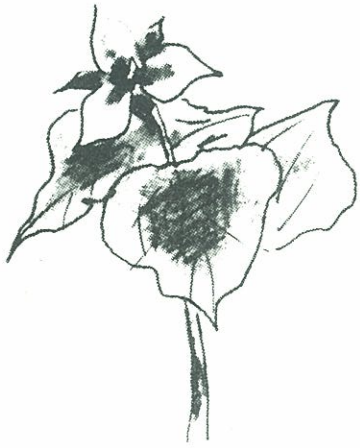
しかし，このような個人的な感懐は置いても，「図書館は大学の魂である」ことを叫んではばからない。図書館なしの，つまりは書物なしの大学，あるいは学問などはとても考えられない。大学生にかぎって言えば，大学生の大学生たるゆえんのものが，たんに「教わる者」であるのではなく，教官の指導を手づるにして自分で学ぶことにある以上，上手に図書館を使うべきであろう。

ところが，一般に学生の読書離れの傾向がみられる。何年か前，数人の若者とのある会合の席で，読書の重味について口走ったら、なかの一人から妙な反撃をくらった。履歴書の趣味欄によく「読書」と記入するように，読書は趣味なのであり，自分は読書嫌いだから，どうしても，という以外は本を手にしないことにしているというのである。唖然とした。ついにこういう意見をきくような時代とはなったのか，それなら，学問も趣味だということになりかねない，といかにもさびしかった。「苦しい読書」もあることを言うと，それならなおさらだという返答であった。とすれば，その若者には図書館なぞ全く無用の長物であろう。かれは大学生であったから，学問すべき人間であることと矛盾したことを言ってはいるのである。しかし，あまりに空しくてその点を衝く元気が出なかった。

書物と現実の世界を一緒にするのが錯覚であることは明確にすぎる。『論語』の，「学びて思わざればすなわち罔（くらく）」で，最後には，本からとび出し，自分で考えるのではないと危い。ときには，たとえば，『書を捨てよ，町へ出よう』(寺山修司) ということばも素直にきいてよいだろう。だが，結局は，自分の考えを思想にまで高め養うには読書こそが一等のものである。

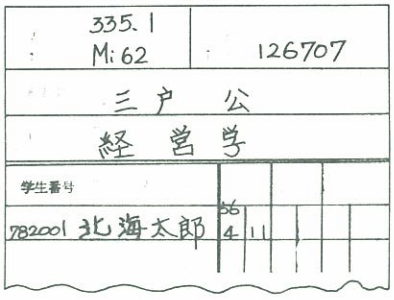
「魂」は働いていてこそ「魂」である。学生諸君にもよく利用されてこそ「魂」はその真価を発揮できる。図書館をして，名実共に「大学の魂」たらしめたいものである。

（おの・せいじ　教養部教授）



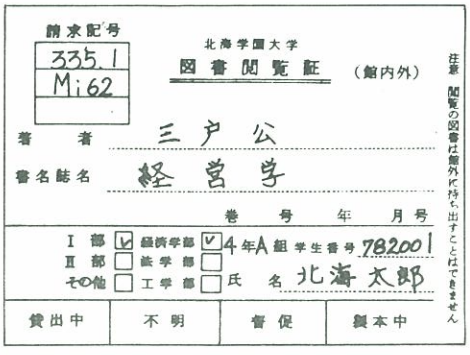
図書館利用案内

―Kさんからの質問に答えて―



〔記入例A〕貸出カート

〔図書帯出証〕



〔記入例B〕図書閲覧証

Kさんから図書館利用全般にわたって次のような質問があったのでお答えしました。

質問内容とそれに対する回答

Kさん　開館時間と休館日についてお尋ねしたいのですが。

館　員　開館時間は次のようになっています。

月ー金曜日：9：30～20：00

土曜日：9：30～18：00

休館日：日曜日・祝祭日・学園創立記念日・年末年始、この他臨時に開館時間の短縮と休館するときは，その都度掲示します。

Kさん　資料の利用方法と手続きについてお尋ねしたいのですが。

館　員　方法としては(1)館内閲覧と(2)館外貸出しがあります。

(1)館内閲覧のときは，図書の表紙または裏表紙をひらくと貸出しカードがあります。(記入例A）必要事項を記入して下さい。閲覧冊数は5冊までです。

(2)**館外貸出し**のときは，まず学生証を係員に提出し，**図書帯出証**の交付を受けて下さい。交付された図書帯出証は卒業まで使えますので大切に扱って下さい。一度に帯出できるのは2冊までです。但し夏冬春の長期休暇中の貸出し期間はその都度掲示いたします。

Kさん　**資料検索方法**についておしえて下さい。

館　員　(1)図書館の大部分の図書は書庫内にありますので，直接現物によって検索することはできません。従って図書を請求するには，目録カードを検索して，必要な図書を探し出します。その図書があれば**図書閲覧証**（記入例B）に必要事項を記入して係員に提出して下さい。

Kさん　コピーサービス（文献複写）についてお尋ねします。

館　員　図書館では文献の複写サービスを行っています。但しノート類はお断りしております。また著作権法によって複写物を制限する場合がありますのでカウンターにお尋ね下さい。

以上でKさんの質問はおわりました。この他まだ知っておいてもらいたいことがありますが，ここではスペースの関係で説明できませんので時間をつくり図書館においで下さい。館員は皆さんのお尋ねについて喜んで応じております。

新着案内 ―――― 経　済　関　係

（昭和56年1月以降に整理された学生用図書の一部です）

新日本新書　30―a　経済学上　金子ハルオ著　新日本出版社　1968　081　Sh64

国家と地方自治の行財政論　坂本忠次著　青木書店　1979　318.2　Sa32

韓国経済入門　金日坤著　東洋経済　1979　322.21　Ki41

経済学叢書　現代の金融経済　岡本磐男他著　世界書院　1979　330.8　Ke29

経済学全集　12　第2版　経済成長論　安場保吉著　筑摩書房　1980　330.8　Ke29

経済人類学序説　M．ゴドリエ著　日本ブリタニカ　1980　331.01　G55

私的企業と社会的費用　K．W．カップ著　岩波書店　1959　331.01　Ka16

経済学原理　第1編　J．ステュアート著　東京大学出版会　1980　331.01　St5

政治経済問題四論　J．タッカー著　東京大学出版　1970　331.01　Tu2

「J．S．ミル経済学原理」への評解　上下　N．G．チェルヌィシェフスキー著　岩波書店　1979　331.32　C39

サミュエルソン経済学体系　2　P．A．サミュエルソン著　勁草書房　1980　331.39　Sa59

J．S．ミルと市民社会　深田弘著　御茶の水書房　1972　331.32　F51

一般的均衡理論　福岡正夫著　創文社　1979　331.39　F82

マクロ経済学の基礎　牛嶋正　林敏彦編　有斐閣　1980　331.39　U93

再生産論の基本問題　小林賢斎著　有斐閣　1975　331.4　Ko12

新交易論　J．チャイルド著　東京大学出版会　1967　331.5　C45

利潤の理論　ミクロとマクロの統合　A．ウッド著　京都　ミネルヴァ　1979　331.64　W86

日本経済分析入門　小尾恵一郎編　有斐閣　1979　332.1　O14

西洋経済史―講座―4　大恐慌前後　入江節次郎　高橋哲雄編　同文館　1980　332.3　Se19

アメリカ経済史　S．ブルシェイ著　日本経済評論社　1980　332.53　B78

アメリカ独占資本主義　鈴木圭介編　弘文堂　1980　332.53　Su96

フランス経営史　原輝史編　有斐閣　1980　335.02　H31

現代巨大企業と独占　坂本和一著　青木書店　1978　335.2　Sa32

日本の独占企業　5　独占分析研究会編　新日本出版社　1971　335.27　D83

多国籍企業　E．J．コールド著　東洋経済　1976　335.28　Ko55

エコノミスト

『私の履歴書』―経済人―全18巻
日本経済新聞社、昭和55年6月―56年2月刊

この履歴書シリーズは昭和31年日本経済新聞の文化欄で取り上げられ，今日にきている隠れたベストセーラーである。東京急行会長の五島慶太から始まり，三井不動産会長江戸英雄で終っているが，登場する財界人は134人である。

ほとんど日本を代表する一流経営者が自らの半生を語ることで，若い人達へ人生哲学を伝授しようとしている。一読に値する貴重な書物である。

（**大場四千男**　経済学部助教授）

═法　律　関　係═══新着案内

高文堂新書　19　検事物語　出射義男著　高文堂　1977　081　Ko14

三一新書　872　裁判官の内幕　松永憲生著　三一書房　1978　081　Sa63

法制執務事典　浅野一郎編　ぎようせい　1978　320.3　A87

ポケット註釈全書　1　刑法　第3版　小野清一郎〔等〕著　有斐閣　1980　320.8　P76

判例と学説　4　民法3―親族・相続―　川井健編　日本評論社　1976　320.98　H29

法学入門　新版　末川博編　有斐閣　1980　321.01　Su16

自然法　A．P．ダントレーヴ著　岩波書店　1952　321.1　D61

日本法の生成と法思想―明治以降を中心として―　色摩辰雄著　三崎堂　1978　321.21　Sh33

法制史研究　22（別冊）法制史教育の現状と問題点　法制史学会編　創文社　1973　322.05　H91

民法入門　改訂版　幾代通　遠藤浩編　有斐閣　1980　324.01　I39

日本担保法史序説　小早川欣吾著　法政大学出版局　1979　324.3　Ko27

商法概説　2　改訂版　大隅健一郎　大森忠夫編　有斐閣　1979　325.1　O79

罪刑法定主義　大野真義著　世界思想社　1980　326.01　O67

民事訴訟法仲裁手続の解説　倉田寛吉著　中央大学出版部　1979　327.5　Ku56

刑事訴訟法の実際問題　新版　伊藤栄樹著　立花書店　1977　327.6　I89

刑事裁判と国民性　総括篇　青柳文雄著　有斐閣　1979　327.61　A57

最高裁判所の役割　A．コックス著　東京大学出版会　1979　327.93　C89

国際私法入門　沢木敬郎著　有斐閣　1972　329.6　Sa94

法人税法　新訂　湊良之助著　税務経理協会　1979　345.1　Mi39

法人税法概説　改訂版　小松芳明著　有斐閣　1980　345.3　Ko61

コンメンタール労働組合法　付・労働関係調整法　中山和久〔等〕著　有斐閣　1980　366.1　N45

特許法50講　増補改訂版　紋谷暢男編　有斐閣　1980　507.23　Mo38

意匠法25講　紋谷暢男編　有斐閣　1980　507.25　Mo38

詳解道路交通法　改訂版　木宮高彦　岩井重一著　有斐閣　1980　685.1　Ki34

航空犯罪と国際法　栗林忠男著　三一書房　1978　687.7　Ku61

ジュリスト

『月刊法学教室』

書評という範疇に属さないかとも思われるが，「月刊法学教室」（有斐閣）をとりあげる。現代における情報量の飛躍的増大は，法学の分野においても例外ではない。このような中で，この法律雑誌は，学生のための課外講座として，受験雑誌としてのみならず，広い視野に立って法学的思考能力を高めるという目的に奉仕するものといえよう。とくに，「基礎講座」の中の諸論説が学生諸君にとって有意義なものであろう。執筆陣も，わが国の一流の学者が名を連ねている。

（**小林資郎**　法学部助教授）

新着案内 ―工学関係―

基礎数理統計 関口愷夫 條原靖忠 小森尚志著 共立出版 1977 418.8 Se27

重力 坪井忠二著 岩波書店 1979 423.6 Te15

演習熱力学―図解―北山直方著 オーム社 1979 426.5 Ki74

星空の四季―カラーアルバム― 藤井旭著 1979 誠文堂新光社 443.8 F57

新標準星図 中野繁編著 地人書館 1977 443.8 N39

月―写真集― ＮＡＳＡ協力 小尾信彌著訳 朝倉書店 1978 446 N56

月面フォトアトラス―写真解説―高橋実著 誠文堂新光社 1978 446.4 Ta33

撓角法 小野薫著 紀元社 1957 501.34 O67

土木工学大系 10 15 26 10材料工学２―基礎― 15設計論 26ケーススタディ交通２ 彰国社 1980 510.8 D81

土・基礎調査設計マニュアル―計算図表を中心とした 福岡正己編 近代図書1975 511.3 F82

応用土質基礎工学 上下 森田定市著 東海大学出版会 1979 511.3 Mo66

建築測量 崎山宗威著 彰国社 1979 512.9 Sa42

建築空間の魅力―私の体験―芦原義信著 彰国社 1979 520.4 A92

無窓 白井晟一著 筑摩書房 1979 520.4 Sh81

建築は兵士ではない 鈴木博之著 鹿島出版会 1980 520.4 Su96

村野藤吾和風建築集 村野藤吾著 新建築社 1978 520.8 Mu53

文化財と建築史 関野克著 鹿島出版会 1974 521 Se27

鋼構造設計演習 鋼構造設計演習委員会編 技報堂 1979 524.6 Ko44

木造階段の工法 佐藤日出男 理工学社 1978 524.87 Sa85

鉄筋コンクリート造の実用的解体工法 桜井荘一 毛見虎雄 平賀友晃著 理工図書 1980 525.1 Sa47

住宅平面図集―30㎡―119㎡ 248,種―住宅金融普及協会編 新建築社 1975 527.1 J98

伝熱工学例題演習 班目春樹著 コロナ社 1979 533.1 Ma25

新ベルトコンベヤの計画と管理 日本鉱業会コンベヤ研究委員会編 白亜書房 1979 537.5 N77

照明設計の実際と考え方 角取猛司著 東京電気大学出版局 1978 545 Ka86

鉄鋼便覧 3(1)―圧延基礎鋼板―日本鉄鋼協会編 丸善 1980 564.03 Te31

日本屏風絵集成 10 15 10景物画 15風俗画 講談社 1979―1980 721 N77

テクノロジスト

真鍋恒博著

『省エネルギー住宅の考え方』

相模書房 相模選書 54年10月刊

本書は住宅の省エネルギーを，構法の立場から広い範囲に渡り，イラスト入りの説明をしている。読者層は専門向きの所もあるので，本学の建築学科の学生には適当な入門書と言える。本州中心の内容も多いので直ちに本道で取り入れられない部分もあるが，これを機に北海道らしい省エネルギー住宅を考えて見るには良い機会である。 定性的内容なので専門的な講義への前奏として学生諸君の興味を引くに十分なものである。

（佐々木博明 工学部講師）

═教　養　関　係═══新着案内

北大選書　1―5　1.文化と環境　2.辺境の風景　3.北海道の自然保護　4.ロシア人の日本発見　5.指で聴く　北大図書刊行会　1979　081　H82

自己意識の心理学　梶田叡一　東京大学出版会　1980　141.93　Ka23

パーソナリティ　水島恵一著　有斐閣　1980　141.93　Mi96

宗教の人間学　谷口茂著　東京大学出版会　1980　160.1　Ta87

地図の風景　北海道編　1 2　堀淳一　山口恵一郎　籠瀬良明著　そしえて　1979―1980　291.08　C49

フランス六章―フランス文化の伝統と革新―饗庭孝男編　有斐閣　1980　302.35　A17

社会科学の論理　T. W. アドルノ〔等〕著　河出書房新社　1979　361.234　A16

家族心理学　岡堂哲雄編　有斐閣　1978　367.3　O36

学校の歴史　1―5　仲新監修　第一法規　1979　370.8　G16

人間形成の研究　野村新〔等〕著　福村出版　1977　371　N95

ペスタロッチ伝　R. de ガン著　学芸図書　1975　371.28　G92

数学学習の心理学　R. R. スケンプ著　新曜社　1973　375.4　SK

青年期の進路選択―高学歴時代の自立の条件―山村健　天野郁夫編　有斐閣 1980　376.8　Y82

登校拒否―どうしたら立ち直れるか―詫摩武俊　稲村博編　有斐閣　1980　493.937　Ta74

心の病に効く薬―向精神薬入門―風祭元編　有斐閣　1980　499.1　Ka99

ドイツ語の入門　藤本淳雄著　白水社　1979　845　F59

英語からドイツ語へ　藤田五郎著　第三書房　1977　845　F67

みんなのドイツ語入門　信岡資生著　三修社　1979　845　N91

やさしいドイツ語　関口存男著　三修社　1979　845　Se27

初級ドイツ語―会話と文法―R. シェーパース著　日本放送出版協会　1976　847.8　ScI

たのしく覚えるフランス単語666　猪狩広志著　駿河台出版社　1974　854　I31

NHKフランス語入門　第2版　丸山圭三郎著　日本放送出版協会　1979　855　Ma59

ひとりで学ぶフランス語会話　安田悦子著　第三書房　1972　857.8　Y62

日本文学史通説　久松潜一著　有斐閣　1979　910.2　H76

現代短歌を学ぶ　本林勝夫　武川忠一編　有斐閣　1980　911.1　Mo82

◇＝◇＝◇＝◇＝◇ **ユマニスト** ◇＝◇＝◇＝◇

網野善彦著

『日本中世の民衆像―平民と職人―』

岩波書店（岩波新書）1980年10月刊

1974年の『蒙古襲来』（小学館版『日本の歴史』10）以来，非農業民を軸に全く新しい視点から日本の中世社会像を示してきた網野氏の新著である。これまでの土地所有中心の見方と異なる視点から，史料の読み方や「年貢」・「職人」などの言葉に新しい光があてられ，生き生きとした中世社会の有様がわかり易く描き出されている。しかも，網野氏の目指すところが，今だに我々を呪縛している「天皇制」の秘密を解き明かすことにある点に注目したい。

（**藤田正**　教養部助教授）

図書館雑記

〝満 員 御 礼〟

経済学部卒業生　後藤田　利　文

○学園の図書館は非常に奇怪な現象を毎年のように起します。しかもそれは，二月・九月に現われる……。ここまで言うと,それが何なのか皆ピンと来るのではないかと思いますが，つまりそれはこの時期に限って〝満員御礼〟となるという事なのですが。

私も含めた学園大生の多くはなかなか図書館に寄り付かないようです。まあ！なかには，図書館をとてもよく利用していると言う方々も居るのですが？実のところ彼らの多くは暇つぶしに新聞を読みに来ているという青春諸君であったりするのです。もっとも，こんな図書館の利用法があっても良いかなと思ったりもするのですが。しかし〝これしかない〟では非常に寂しい気がする訳です。

さて，この寂しい図書館も定期試験時期に近づくと，一転して熱気立ち込もる情報収集の場となり，ノートやコピーを小脇に抱えながら顔を引きつらせ,「誰か！○○のノートをたのむ」と懇願する風景に満ち溢れるのです。而じて彼らはテーブルの上にノートや本・コピーを一杯にひろげて勉学に勤しむ姿を見せてくれる事となり，図書館はその機能を十分に果たすことの出来る自らを発見する事になります。

サークルは活動とアルバイトに明け暮れる毎日が平均的学園生のようですから，こんな図書館風景を取り上げて，学生たちがいかに勉強しないかの証拠とされても返す言葉を見つける事が出来ないわけなのです。

しかし，それでも，なかには「直接本を手に取って内容をある程度確認してから借りることが出来れば良いのに」等々と図書館利用を考えていたりする学生も居るのですよ。実際の所，カードでリスト・アップした本を図書館員の方にせっかく取り出して来てもらっても，自分の必要とする内容ではなかった為に直ちに返本してしまう事も間々あるのです。

僅かなりとも，こんな意見を大切に思ってくだされば連日「満員御礼」となる日々も近づくのではと期待しているのですが，楽観すぎるでしょうか？

法学部卒業生　和　佐　俊　美

「北海学園大学附属図書館」。おそらくこれが，正式な呼び名であろう。しかし，我々は，そう呼ばずいつも「図書館」と呼んでいた。

今回の試験期間中に，原稿を書いてくれないかと友達に言われ，最後だから書いてみようかなという気になった。しかし今，原稿用紙に向うと，何を書いていいのか皆目見当もつかず，いろいろと考えた結果，今まで図書館であった思い出や，図書館について思っていることなど書いてみようと思う。

私が，初めて図書館の門をくぐったのは，大学の入学式の時だった。その後利用する機会はあまりなかったが，定期試験の期間中には，必らずといってよいほど利用していた。それも，今回だけになりそうだが。友達も，その期間だけは，利用していたので，図書館に行けば，数人の友達が必らずいた。だから，友達とは図書館が待ち合わせ場所になっていた。最初に図書館に足を運んだのは，友達に会うためだった。試験期間外でも，授業のない時などに，新聞を読みに行ったり，待ちあわせ時間の合間に行ったり,時々利用していた。

私にとって図書館とは，私の持っていない専門書，小説など興味をひく本などがたくさんあり，必要な本以外あまり持っていない私にとって，もっとも身近にある，そしてまた非常に利用しやすく，価値のある存在だったような気がする。

しかし，今考えると，試験期間以外あまり，利用していなかったようである。ためになる本などたくさんあるのだから，もっともっと利用すれば良かったなと思う。それが，今の図書館に対する気持ちである。

レファレンス・コーナー

本学所蔵白書類

観光白書（総理府）	688.21	So 55
青少年白書（総理府）	369. 4	So 55
交通安全白書（総理府）	681. 3	So 55
独占白書（公正取引委員会）	335.27	Ko 83
警察白書（警察庁）	317. 3	Ke 27
経済白書（経済企画庁）	332. 1	Ke 29
世界経済白書（経済企画庁）	333. 6	Ke 29
国民生活白書（経済企画庁）	365.021	Ke 29
科学技術白書（科学技術庁）	502. 1	Ka 16
原子力白書（原子力委員会）	429.021	G 34
環境白書（環境庁）	519. 4	Ka 56
犯罪白書（法務省）	369.12	H 83
厚生白書（厚生省）	364. 3	Ko 83
人権白書（厚生省）	364. 3	Ko 83
通商白書 総論 各論(通産省)	678.29	Ts 91
電源開発の概要（通産省）	540.921	Ts 91
経済協力の現状と問題（通産省）	333. 8	Ts 91
中小企業白書（中小企業庁）	335. 3	C 67
運輸白書（運輸省）	685.21	U 77
海上保安白書（海上保安庁）	558. 8	Ka 21
建設白書（建設省）	332.98	Ke 51
地方財政白書（自治省）	349.21	J 47
消防白書（消防庁）	317.79	Sh 95
図説漁業白書（農林統計協会）	660. 5	N 96
図説農業白書（農林統計協会）	610. 5	N 96
海外市場白書（日本貿易振興会）	678.21	N 77
司法研習白書（日本弁護士連合会）	327.	N 77
図説林業白書（林野庁）	650.21	N 96
労働白書（労働省）	366.021	R 59
図で見る中小企業白書（中小企業庁）	335. 3	C 67
防災白書（国土庁）	451. 9	Ko 45
コンピュータ白書（日本情報処理開発協会）	549. 9	N 77
北海道経済白書（道経済開発調整部）	332. 1	H 82
世界農業白書（国連食糧農業協会）	612	Ko51

文献解題

日本の国語辞典

「広辞苑」　新村出編　　岩波書店

第一版は昭和30年（1955），第二版は昭和44年（1969）の刊行。第一版は，新村猛教授の実父，新村出博士によって書かれている。それによると，新村出博士は，昭和42年（1967）に第二版の完成を見ずに91歳にして世を去られている。著者は，「とにかく，簡明にして平易，広汎にして周到，雅語漢語，古語新語，慣用語と新造語，日用語と専門語，旧来語と新外来語，新聞語と流行語，みなつとめて博載を期した」といっておられる。

ここに「広辞苑」の特色と長所とは，よく集約的にいいあらわされており，又，学術上の専門語も，地名，人名の固有名詞も広汎に取りあげられており，じつに便利であり，重宝である。

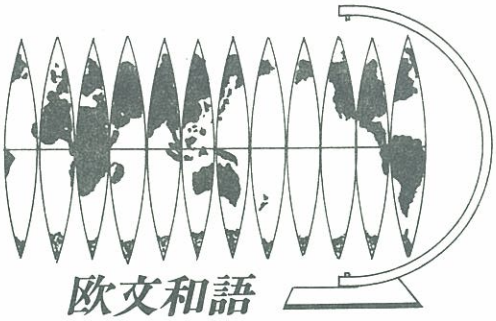
その意味で，狭義の国語辞典と小項目主義による百科辞典との，中間に位置づけされるべき辞典といっていいだろう。収録項目はすべて約20万である。

「大漢和辞典」　諸橋轍次博士著　大修館書店

全13冊，うち索引1冊。総計1万5千頁。

第1巻刊行が，昭和30年(1955)で，第12巻の刊行が昭和34年である。本書は，単に語句の注釈だけで終っているのでなく，地名，人名の解説,制度，法律等の用語の意義，古書の解題，年号等にも及び，一々その出典を明記しているので，この辞典を十二分に活用すれば，正確な根拠のある原書をつきとめ，さらに関係記事をも広く探り出す便宜がある。又、第13巻の一巻全部を索引にあて，索引をこまかに，(1)絵画索引，(2)字音索引，(3)字訓索引，(4)四角号碼索引，の4項目にわけて，大変便利である。特に東洋史に関して調べる際，肝要な二十四史，九通などに，それまで，簡便な索引書がなかっただけに，本辞典は，それらをたやすく調べ出す手がかりを，懇切に与えてくれた。又、その規模の厖大さのうえから見て，今だ，世界中でこれほど多数の漢字と漢語を収録する辞書は，現在のところ他にない。

So it goes



（1） *ENGLISH*

教養部講師
宮　下　雅　年

ご存知カート・ヴォネガットのSlaughter—House Five（1969）には呪文のように“Soit goes”という文句が多用されている。200頁余りの小説にこれ程頻繁に同じ文が使われいる例を僕は寡聞にして知らない。これが名句かどうかはともかく，ユニークではある。

ヴォネガットは漸く60年代も半ばを過ぎる頃になってお堅い連中（つまり，ハード・カバーしか読む気になれない人達）からもぼつぼつ高い評価を受けるようになった。この作品もよく売れ，概ね好評であった。それでも，第1章が奇妙に遊離しているといったキズを指摘する人は多い。よく検討すれば，この章で作者は，テーマやそれと表裏一体の技法上の戦略をさりげなく明かしているのがわかるのだが。また，ビリー・ピリグリムは生ける屍である，という強烈な指弾もある。これは“Soit goes”に直接関る。つまり，ビリーの（というかTralfamadorianの）万事「そういうものだ」という宿命論，あるいは決定論がどうにも退嬰的で許せないという訳だ。

のろまのビリーはドイツ戦線をさまよい捕虜となった。ドレスデンの「第5屠殺場」で寝起きさせられ，そうして味方によるかの大爆撃をかろうじて生き抜いた。帰国すればしたで営利にばっちり裏打ちされた社会を生きねばならない。その最中にあって，彼のけいれん的時間游泳であるとかTralfamadore という異星へ誘拐されてしまうといったことどもは唐人の寝言ではなく，生きのびようとする者の必死の自己劇化なのである。（ついでながら，例えば，A Streetcar Named Desireのブランチのことなども思い出して下さい。）たとえ蟷螂（とうろう）の斧であるにしてもビリーはかく振りかざしたという意義を無視することはできない。

ところで，現実とは何か，というと「そのようになっている」ものとしか言えないと思う。何故食物を得るのに金を払わねばならないか，何故生徒は教師を殴ってはいけないか，絶対的根拠に欠ける。ただ「そういうことになっている」のであり，人はそれを規範等で人為的に補完，強化しているのだ。元をただせば一人ひとりの思い込みが織りなされ，共同化し，通念となる。ところがそれは逆に私達を十把一絡にするたちのものだから，時に息苦しさに耐られぬ者が常識を破ってしまう。ちっぽけな嘘が生れる。とりとめない夢が夢見られる。芸術と犯罪が企てられる。

ビリーの“Soit goes”は確かに努力のとっかかりで敗北していると言える。たが敗れても自分の生を繋ぎとめなくてはならないではないか。Soit goes—

（みやした　まさとし　教養部講師）

キーワード

自　律　訓　練　法

ドイツの大脳生理学者フォクト(Vogt, Oskar)は知的に高い能力をもった人に自己暗示をさせると一定の訓練ののちにはある安定した心理状態に入り，疲労や緊張がとれて頭痛も消失するというような効果を発見，これを基礎として独特の自己暗示的な練習方法を編み出しこれを予防的休息と命名した。この研究に刺激されたベルリン心理療法研究所副所長シュルツ(Sohultz, J. H)は1905年自律訓練法を創唱し，1932年「自律訓練法」を公刊した。ドイツ出身でのちカナダに移ったルーテ（Luthe, W）は自律性中和その他の概念を導入し，1978年「自律療法」全6巻を刊行して，その体系化をはかった。

—内山喜久雄著・心の健康（日本生産性本部刊）より—

閑想歓談

〝大原孫三郎と大原社研〞

経済学部助教授
小　林　真　之

岡山県倉敷市にある大原美術館は有名であるが，大原社会問題研究所（現在法政大学の附設研究機関）の存在を知る人は少ない。大原社研は，倉敷紡績の創業者・大原孫三郎によって，倉敷労働科学研究所・大原農業研究所・倉敷天文台・倉敷中央病院等の文化・社会事業とともに，1919年にその私財を投じて設立されたものである。所長・高野岩三郎（戦後の初代ＮＨＫ会長）の指導の下に櫛田民蔵・久留間鮫造両所員が1920年にヨーロッパに派遣され，英米独仏関係の社会科学系書籍が５万冊ほど体系的・網羅的に収集された。当時のヨーロッパ，特にドイツは超インフレーションに見舞われており，新聞１部を買うのに２千億マルクを必要とするほどマルク価値が低落していた。そうした〞マルク安・円高〞の状況も幸いして，現在ではほとんど入手しえない経済学の稀覯書，古典が大原社研に納められることになり，それはその後の日本の経済学水準を引上げるのに大きく貢献することになった。

「自分のしたことのなかでいちばん役に立ったのは，外国から農研・社研・学研などのために，書物を多く買求めたことになるかもしれぬ」と語った大原の言葉のなかに，企業経営の成功者としてよりも，求道者としての大原の傑出した人間像を偲ぶことができるだろう。人類の進歩は過去・現在の反省から始まるのであり，その多くは書物を通じて間接的にのみ知ることができる。図書館は，多数の先人の労苦の結果として集積された〞知恵の宝庫〞であり，社会的視野を広げようと志す者にとっての〞導きの糸〞となるだろう。

（こばやし　まさゆき　経済学部助教授）

AIR MAIL

〞エンジョイ〞

工学部助教授
佐　藤　　順

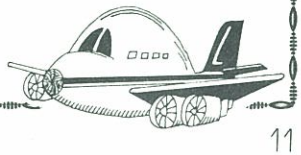
テキサス州は面積が日本の２倍，人口は日本の10分の１，しかもあまり高い山地はなく広大な平地を擁している。従って登山やスキーなどのスポーツに代って，水泳やジョギング，スケートのように起伏の少ない土地に合ったスポーツが盛んである。特に水泳は皆泳と思われる程，どこにでもプールがある。児童公園のわきには50ｍ級のプールがあるのをよく見かけたし，ホテルや大きなアパートには必ず，又，小さなアパートや個人の家には思い思いの形をした小さな池のようなプールがある。彼らは飛び込みが実に好きだ。小さな子供から大人まで男女を問わずいさぎよく飛び込んでいる。山地がないから重力エネルギーの解放をこれで楽しんでいるのかと思うほどだ。

「泳ぎは好きだが，あまり泳げない」というと彼らは一瞬けげんな顔をする。彼らにとって本人が泳ぎを楽しんでいるかどうかが重要なのであって，上手，下手は問題でないのだ。

もし，日本で「泳ぎが好きだ」と言おうものなら上手か否か，いくら泳げるか等の問が十中八九戻ってくる。趣味はその人のもの。その人なりの楽しみ方でよいのに，エコノミックアニマルの我々は趣味にさえ競争心をみなぎらせているのかと我身をふり返って苦笑した。

とにかく，どこにでもただで入れるプールがある。夕食後，家族で一泳ぎ，そんな中で「泳げる」「泳げない」という意識はどこかへ消えてしまった。子供達は次々と新しい遊び方を発明して水と戯れている。こういうのをエンジョイというのだろう。

（さとう　より　　工学部助教授）



「『神曲』煉獄篇第30歌」

ダンテ『神曲』（ランディーノ版）500年によせて

教養部講師　本城誠二

ダンテを始めて読んだのは，9年程前である。大学の教養から学部に移行し，意欲に燃えていた時期である。今考えてみると実現できる訳もないのだが，英文科の学生として，英米文学はもとより，ヨーロッパの古典を読破したいと考えていた。

当然の如く,『神曲』には歯が立たなかった。

通読した記憶がないので，途中で放棄したのだと思う。それでも，一ケ所だけ，頭に残っている場面があった。今回，寿岳文章訳，ウィリアム・ブレイクの挿絵付で，再読してみると，こうあった。煉獄篇の第30歌，ダンテが，師ヴェルギリウスと別れ，ベアトリーチェと出会う所である。

ヴィルジリオに言おうとした「ふるえわななかぬ血は，ひと雫だに今の私に残らず，げに知る，昔の焔の形見を。」

しかし，ヴィルジリオは，既にわれらから身を隠してしまっていた。世にも慕わしい父ヴィルジリオは，私がおのれの救いのため，私のすべてを委ねていたヴィルジリオは。」

「ダンテよ，ヴィルジリオがいなくなったから，とて，まだしばらくは泣くな，まだしばらくは泣くな，やがてほかの剣ゆえに泣かねばなりませぬぞ。」

この部分は，最愛の妻エウリュデケを見失うオルペウスの嘆きを歌ったヴェルギリウスの「牧歌」の影響があると言われている。また,『神曲』全篇を通じて，ダンテの名前が出るのはここだけである。

クルティウスの『ヨーロッパ文学とラテン中世』にもあるように，ヴェルギリウスとベアトリーチェは，共にダンテの師であり，理性と恩寵，知識と愛を象徴している。

地獄，煉獄を通して，理性であり，知識であったヴェルギリウスに導かれていたダンテが，この煉獄の終り，天国へ至る道の途中で，愛であり，恩寵であるベアトリーチェに出会うこの場面は，全篇を通して，最も，心引かれる部分であり，また，クライマックスであるとも言える。

『神曲』全体を通して言えば，ギリシャ，ローマの古典，キリスト教，当時のイタリアの政争に関する記述が多く，それらに興味があるか，また，よく知っていなければ，理解できない部分が多い。しかし，ある作品が人をひきつけるのは，全体の偉大さであると同時に，細部の輝きでもあることを考え合せれば,『神曲』の全体を理解できたとは言えないが，その極く一部，或る言葉，或る言葉のつながり，そして，その意味する所を感じることができたのは貴重な経験だったと言える。

（ほんじよう・せいじ　教養部講師）

編集後記

春の全国高校野球大会もおわり，いよいよ新学期が始まります。新入生の皆さんには夢にまでみた大学生活が始まりましたね！

早目に単位その他の諸手続きを済ませ四年間じっくり図書館で読書してみませんか。そのお手伝いは館員が喜んでいたします。さて今回発行された「だより」は新年度第1号（3巻1号春季号）です。

この号は館長はじめ諸先生ならびに卒業生の方々から貴重な原稿をお寄せいただきました。この他に利用案内も掲載してあります。お気軽にお読み下さい。

この紙面をおかりして今回原稿を寄せていただきました皆様には厚くお礼申し上げると共に今後とも一層のご協力をお願い申し上げます。

なお,「だより」にご希望・ご意見がありましたらお知せ下さい。

北海学園大学附属図書館報「図書館だより」Vol. 3 No. 1（通巻77号）1981年4月10日発行
北海学園大学附属図書館発行　062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号　電話 011－841－1161（代表）
内線，総務係 272　整理係 273　閲覧係 274～275
工学部分室　064 札幌市中央区南26条西11丁目　電話 011－561－2911（内線　64）